

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 25 日現在

機関番号：14601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885048

研究課題名(和文) 批判的思考力育成の基盤をなす地理教育の理論と実践の解明

研究課題名(英文) Research on theory and practice of geography education enabling the base of cultivation of critical thinking

研究代表者

広瀬 悠三 (Hirose, Yuzo)

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：50739852

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、(1) 批判的思考力育成の基盤となる地理教育の理論をカントの地理教育を手がかりに明らかにするとともに、(2) 具体的に応用できる実践方法を、イギリス・アメリカの最新の地理教育の動向と、サマーヒル・スクールの実践をもとに解明した。大地に存在するあらゆるものを扱う地理学こそ、現実の多様な事物や事象に入り込むことができ、自分の見方を相対化する批判的思考力を形成することができる。しかしそのような批判的思考力は単なるスキルではなく、学問的な教科の知識と結びついた統合的な力である。さらにこの思考力は、地理の授業のみならず、多様な文化的な背景をもつ生徒どうしの討論を通してより現実的に形成される。

研究成果の概要(英文)：This research aims at clarifying 1) theory of geography education which can basically cultivate critical thinking, referring to Kantian geography theory and 2) its concrete practical methodology based on current British and American research on geography education, and the practice in Summerhill school. Through learning geography which can treat with everything on this earth, one can get involved in actual various things and phenomena, and have critical thinking with relativizing one's own position. However, this critical thinking is not a mere skill but capability connected with powerful disciplinary knowledge. Furthermore, this ability of critical thinking can be cultivated not only by geography lessons but also by a school meeting with different students affected by various cultures.

研究分野：教育学

キーワード：地理教育 世界市民性 批判的思考力 対話 ジオ・ケイパビリティ 多様性

1. 研究開始当初の背景

私は近代ドイツの哲学者カントの教育哲学研究から出発したが、とりわけ日本の教育基本法や道德教育にも影響を与えているカントの道德教育に関心をもっていた。カントの道德教育に関する研究では、モラルジレンマ授業に係る道德的問答法 (L. Koch, *Kants etische Didaktik*, 2003) や、自律と他律といった事象が個々に研究されている (J. S. Johnston, *Moral Law and Moral Education: Defending Kantian Autonomy*, 2007)。しかしカントが、道德教育の基盤は地理教育にあることを、翻訳すらされていない遺稿や講義ノートで再三主張している点は、まだ誰も注目しておらず、私は人間形成の基盤は地理的な営みにあるのではないかと考えるようになった。なぜなら、地理的な営みとは、この大地に存する具体的で多様な事物を安易にまとめることなく、多様なものを、多様なものそのものとして自らの生と関連させて受け入れ、批判的に考察し、かつ用いるという、極めて道德的で寛容な姿勢の形成に根本的に寄与するものであるからである。カントにとどまらず、新教育運動を主導し、日本の学校教育にも多大な影響を及ぼしているデューイ (J. Dewey, *Democracy and Education*, 2010) や、特定の宗教に依らない私立学校としては世界最大の 1000 校以上の広がりをもつシュタイナー学校の創始者シュタイナー (R. Steiner, *Erziehungskunst*, 2005) の教育思想と実践も、地理教育を教育の柱に据えている。これらの教育の理論・哲学的動向と、実際の地理教育の実践を踏まえ、歴史教育に比べて軽視されがちな地理教育を人間形成論的に解明し、その上で力強く遂行する教育実践を構築する必要があることを認識するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、「批判的思考力育成の基盤をなす地理教育の理論と実践」に関するものである。グローバル化が進む社会の中で、異文化にも配慮しながら思考する批判的思考力を身につけることがまさに喫緊の課題となっている。本研究は、地理教育によってそのような多様な観点から物事を思考することの理論的意味付けと、その具体的実践の内容を解明することを目的としている。とりわけ理論においては、近年とみに注目を集めている、批判的思考力をはじめ体系的に論じたドイツの哲学者カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の世界市民的地理教育論を中心に考察しながら、その具体的実践として行われているイギリスにおいて見られる新しい地理教育の内実と実践的意味を明らかにすることをめざす。

3. 研究の方法

(1) まず平成 26 年度には、カントの地理教育を人間形成論的な視点から吟味すること

で、批判的思考力の育成の基盤をなす地理教育の内容と意味を解明する。その際の方法としては、カントのドイツ語の原典を読解するとともに、必要なドイツ語、英語、フランス語等の文献を参照しながら研究を進める。(2) 次に平成 27 年度では、イギリスのサマーヒル・スクールに観察参与するとともに、子どもや教師にインタビューを試み、批判的思考力を育成する地理教育の意味と、子どもの批判的思考力の発達、また他の日常生活や道德的行為への影響などを調査する。

4. 研究成果

4-1. カントの地理教育についての研究状況の特徴

カントの地理教育に関する研究は、断片的に教育における地理学について言及しているものは散見されるものの、地理教育の内実と意義を十分に解明した研究はない。地理教育の前提となるカントの自然地理学に関する研究は、20 世紀初頭にアディッケス (E. Adickes) がリンク編集のカントの『自然地理学』を詳細に検討することによりカントの『自然地理学』の意義を論じたのが始まりである。また 20 世紀前半には地理学の重鎮ハーツホーン (R. Hartshorne) が、歴史学の下女とみなされていた地理学を、独自の価値のあるものとして位置づけたカントの地理学を高く評価している。その後は、1970 年代に入ってようやくカントの自然地理学の考察が再び取り上げられるようになった。近代地理学と現代地理学の両方を考慮に入れながら、カントの自然地理学の意義を論じたメイ (J. A. May) の研究によって、埋もれていたカントの自然地理学の内容が、歴史的な背景も踏まえて再評価された。メイの研究は、カントの地理学研究においていまだ必須文献になっているが、地理教育に関しては、わずかにカントの地理教育は青年教育の一環であるに過ぎないとして、大学における青年教育に限定して言及しているだけである。もちろん、形式的にはカントは、ケーニヒスベルク大学で学生への教育的配慮から自然地理学を講義していたが、他方でカントは大学以前の学校教育における地理教育の不十分さを補うために自然地理学を講義する必要性を感じて行ったと語っており、地理教育は青年教育に限定されるわけではない。また『教育学』では、むしろ自然地理学は学問的な (wissenschaftlich) 学びの始めに取り入れられるべきものであることが指摘されており、大学教育における地理教育という理解は一面的であると言わざるを得ない。この時期には地理学研究の領野からさらにビュットナー (M. Büttner) が、カントの自然地理学は自然神学から解放されており、メランヒトン (P. Melancton, 1497-1560 年) の目的論的地理学の伝統に基づきながらニュートンの宇宙存在論の影響を受けていることを明らかにして、カントの自然地理学が 18

世紀の地理学の大きな転換点に位置していることを洞察している。この研究は、地理学史的な観点からのカントの自然地理学の重要性の再認識と捉えることができる。その後、カントの教育学研究の文脈では、1980年代にヴィンケルス(T. Winkels)やニートハマー(A. Niethammer)が『教育学』において論じられている地理教育を紹介程度に触れてはいるが、そこではカントの地理教育の内実や意義が解明されることはなかった。

4-2. カントの自然地理学と地理教育による批判的思考力の育成

2000年代に入ると、カントの地理教育の基礎となる自然地理学に関する研究は少しずつではあるが、進展を見せるようになった。地理学研究のみならず、空間論の観点から新自由主義やポスト・コロニアリズムを検討しているハーヴェイ(D. Harvey)は、世界市民性を論じるにあたって、はじめの1章をカントの自然地理学に割り、カントの自然地理学の独自性に目を向けるよう注意を促している。ハーヴェイは、すでに半世紀以上も前にハーツホーンが指摘していたように、カントが規定した地理学概念の先見性をまずは評価する。しかしハーヴェイは同時に、ヨーロッパ中心主義的な人種差別的言説を受け入れながら、人間の普遍性を論じようとしているカントの哲学的営みを、自らのヨーロッパ中心主義的な正義を普遍的なものとし、イラクという「周縁」な場所を「悪」としてイラク戦争を起こしたブッシュ大統領の取り組みと変わらないと厳しく断罪している。つまりカントの自然地理学は、多様な文化への眼差しを保持しているように見えながら、結局のところその眼差しは、ヨーロッパ中心主義、白人至上主義を正当化するのに寄与しているだけであるということである。さらに言えば、そのようなカントの自然地理学的眼差しこそが、ヨーロッパ中心主義の温床でさえあるというのである。すでに前述した通り、カントの自然地理学にはヨーロッパ中心主義的言説が含まれていることは否定しがたい事実ではあるが、果たしてそのような記述のみを取り出して、カントの自然地理学は人種差別的なヨーロッパ中心主義的言説であると決めつけるのはいささか早計であるように思われる。というのも、時代背景や、さらに他の自然地理学的言説を慎重に考察しながら、その意味を見定める必要があると考えられるからである。カントは、世界とそこに住む人間を、決して厳密に客観的な中立性をもって考察しているわけでも、また神の目をもって完全に俯瞰的に見ているわけでもない。むしろカントは、彼が生きた世界に一方で足を入れて、その場に根ざして考察しているのである。このような自らの立場から考察することは、考察の第一歩として避けられないことである。したがって、カ

ントのヨーロッパ中心主義的な自然地理学は、誤解を恐れずに言うならば、決して特異なものではないと言わざるを得ない。

カントは1755年にケーニヒスベルク大学の私講師となり、論理学、数学、物理学、そして形而上学を講義し始めたが、翌年の1756年から、自然地理学(Physische Geographie)の講義を開始した。この自然地理学講義は、19世紀初頭にC. リッターとA. フンボルトによって近代地理学が生まれる半世紀も前に行われたものであり、現在の自然地理学と人文地理学で扱われる事物や事象の両方を考察対象として含んでいた。つまり自然地理学は、大地に存在するありとあらゆるものを考察対象にしていたのである。そこでは、海と川、陸、大気圏から始まり、動物、植物、鉱物、また地球に住む人間の文化的営み、すなわち人間の日常生活習慣や政治、経済、芸術、宗教、倫理、哲学が扱われ、さらには世界の地誌的な特徴がアジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカに分けられて論じられている。

地理とはカントにとって、現状の世界認識に不可欠な学びである。また事物や事象は、いかなる場所でも同じものではなく、同じものであっても場所によって大きな差異を含むことになることに注意する必要がある。例えば、インドのガンジス川のほとりを闊歩する装飾された牛と、日本の北海道の牧場に生きる牛は、四蹄動物としては同じものと区別されるが、実際の内実はその場所の気候や環境、さらには文化によって異なっているのである。こうして地理的な事物や事象を学ぶことは、多様な見方や考え方を身に付ける上で非常に有益なことであることが分かる。このような多様な見方や考え方は、まずは自らの存在する場から事物や事象を見ていながら、そこから脱して、自らの事物や事象を相対化して吟味し、さらには新たな視点を手に入れて思考し続けることを促すことを意味する。こうしてより具体的に、人間は一つの場に一度いながら、そこを脱して考え続けるという批判的思考力を身につけることができるのである。

4-3. イギリス・アメリカの地理教育の最新の理論的動向

当初はイギリスの公立学校での地理教育において批判的思考力の育成をどのように行われているかを調査する予定であったが、近年では新しい地理教育の理論的動向が現れており、それらは現実の地理教育の実践としては未だ実現されていないという現状を目の当たりにした。そのため、最新の動向を考察することで、批判的思考力を育成する地理教育の可能性を捉えるために、イギリスのユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの教育研究所で教鞭をとるとともに、地理教育の世界的権威であるデビット・ランバート(David Lambert)教授と意見交換をするとともに、

アメリカを代表する地理教育の研究者であるアメリカ地理学会ディレクターのマイケル・ソレム (Michael Solem) 博士と合同ワークショップを行った。以下、ランバート教授とソレム博士との議論・ワークショップを通して明らかになったことを記したい。

近年の教育学の世界的な動向として、コンテンツ・ベースの学びから、コンピテンシー・ベースの学びへの転換がなされている。OECD の PISA テストにも見られるように、単なる学問教科領域の知識の習得ではなく、それらをどのように利用するかという技能が重視される傾向にあるということである。地理教育もこの例外に漏れず、地理的な知は極端に軽視され、むしろ地図を読む技能やスキル、空間的認知能力の育成が強調されている。しかしそれでは、知識か技能かという二項対立的な選択を乗り越えることができず、地理教育といえども地理を扱うことなく単なる汎用性のある技能の習得のみをめざすことになり、ひいては空虚な抽象的な思考力の育成に加担しかねない危うさを含んでいる。ここでこのような状況を打破する継起のなるのが、アマルティア・センとマーサ・ヌスバウムが提唱しているケイパビリティ (Capability) という概念である。ケイパビリティは、様々な精神的な機能を自由に用いる力を意味し、知識と技能を統合する力として捉えられる。とりわけランバートはジオ・ケイパビリティ (GeoCapabilities) を提唱し、単なる統合的な力ではなく、あくまでも地理的な知を重視した統合的な力こそが、これからの 21 世紀の諸問題にも立ち向かうことのできる思考力に寄与するのではないかと考えている。

このジオ・ケイパビリティで重視されるのは、力強い学問教科の知識 (PDK: Powerful Disciplinary Knowledge) である。この PDK としての知識は、日常知 (Everyday Knowledge) ではなく、抽象的で理論的であって学問教科に由来しており、単なる知識の集積ではなく、数々の知識をいかに結びつけて体系を構築するかに関わる知識のことを意味する。このように PDK としての知識は、単なる個別的で断片的であって空虚な知識ではない。むしろ学問的な体系的知識でありながら、現実を変えうるだけの有機的な連関をもった総合知と言い換えることができるように思われる。そのような PDK としての知識によってこそ、人間は地理的に十分に思考することができるようになると捉えられている。

この PDK としての知識をもたらす地理教育は、さらにわれわれの道徳的な推論にも影響を与えることを指摘しているのがソレムである。地球温暖化問題を十分に洞察するためには、地理的な知識が必要不可欠であり、そのような知識をもたらすものこそ PDK としての知識だということである。

しかしながら、PDK の内実は学問的な知識

であることには変わりはなく、どこまで現実の問題をダイナミックに思考しうる批判的思考力と結びつくかはいまだ未知数な状況である。しかしながら PDK という概念を基点にさらに地理的な批判的思考力育成の検討の新たな地平は開かれた。さらなる考察をすることが求められている。

4-4. サマーヒル・スクールの地理教育の実際：参与観察とインタビュー

フリースクールの世界の草分け的存在であるサマーヒル・スクール (Summerhill school) は、1921 年にニール (Alexander Sutherland Neil) によってドイツで創設された後、イギリスのサフォーク州レイストンに拠点を移し、現在に至るまで教育的活動を行っている学校である。この学校の特徴は、強制的な徹底的な排除と、責任を伴う自由の徹底的な容認である。この二つを保証するため、子どもたちはこの学校で自分の好きなことを自由に取り組むことができる一方で、週に 1 回行われるスクール・ミーティングに必ず出席しなければならない。このようにふつうの公立学校では見られない特徴を有するサマーヒル・スクールでは、自己を表現し主張するだけでなく、他者の声にも耳を傾けることをなされており、そのような中で共同で学校生活を作り上げている点が独自の特色として挙げられる。この思考法は、自分の立場に一度寄り添いながら、そこから脱して自分が以前見ていた事物や事象や、さらに新しいものも吟味しようとする地理的な批判的思考力と類似点がある。したがって、このようなカントの地理教育論に依拠した地理的な批判的思考力形成の方法の一端を、サマーヒル・スクールの実践を通して明らかにすることを試みた。

地理教育的な批判的思考力の形成の源泉を、サマーヒル・スクールに関する文献のみならず、実際にサマーヒル・スクールを訪問して明らかにすることをめざした。サマーヒル・スクールでは、子どもの意欲を満たすために教育が行われるため、地理が教えられるか否かは、地理を学びたいと思う子どもがいるかどうかにかかっている。『恐るべき学校』が書かれた当時には、地理の授業があったことが記されているが、筆者の訪問時には地理の授業は開かれておらず、また地理の専任の教員も在籍していなかった。そのような状況下で、どのように自分だけでなく、自分が捉える事物や事象を相対化して、他者の声も聴きつつ多様な視点から思考できるのだろうか、創設者 A・S・ニールの娘で、校長のゾエ・ニール・レッドヘッド (Zoe Neil Readhead) に直接インタビューした。彼女によれば、地理の授業がないのは、現在の子どもたちが求めていないためであるが、このことは外国の事物や事象に関心がないということの意味するわけではないという。多様な見方や考え方は、教科書に載っている世界地

図や世界の特徴を表す叙述を学ぶことからではなく、異なる文化的背景をもつ人間と直接関わる中でより身につくことができるとのことであった。すなわち、ゾエによれば、現在は 10 数か国からの子どもたちが学校で学んでおり、彼らがともに様々な問題に関して最終的には投票という合意形態を取りながら議論することこそが、地理教育に他ならないと話していた。彼ら子どもたちの主張が、それぞれ育った環境や文化を体現しており、その主張に以下に耳を傾けられるか、が地理的な批判的思考力育成の鍵をなすのではないかということであった。実際にスクール・ミーティングを参与観察させてもらったが、確かに遠慮する東アジアの子どもたちがいたり、小さいながら決して折れずに自己主張をするイギリスの 7 才の男の子がいたり、とまさにスクール・ミーティングは地理的な批判的思考力を育成する基礎的な場所であるように思われた。

サマーヒル・スクールの参与観察から、自分たちの学校生活で起こる問題を話し合い、規則を自分たちで決める話し合いという場、討論の場が、地理的な批判的思考力の有力な実践の場になりうるようになった。従来は、地理教育は地理の授業で行うということが主流であった。しかしながら意外なことに、多様な人たちと意見をたたかわせるということから、多様な環境や文化に目を向けて関わろうとする力を養うことができるといことは、地理教育と特別活動を結びつけて、批判的思考力を育成するヒントを与えられているように考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

広瀬悠三、「道徳教育における宗教 カントの道徳教育論の基底を問う試み」、『道徳と教育』、日本道徳教育学会、333 号、2015 年、31-42 頁。

〔学会発表〕(計 2 件)

広瀬悠三、まず地理から始めるということ カントの地理的道徳教育論の意義を問う、日本道徳教育学会、第 85 回大会、東京学芸大学、2015 年。

広瀬悠三、道徳教育としての自然地理学 カントの自然地理学に着目して、日本地理教育学会、第 65 回大会、奈良教育大学、2015 年。

〔図書〕(計 1 件)

井藤元(編)『ワークで学ぶ道徳教育』ナカニシヤ出版、2016 年。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

広瀬 悠三 (HIROSE YUZO) 奈良教育大学・教育学部・特任准教授

研究者番号：50739852

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()